

2006年3月26日 受難節第4主日礼拝

『受難のはじまり』

(イザヤ 61 章 1~4 節、ルカ 4 章 16~30 節)

イエス様は、30 才になるまでナザレで両親に仕えて過ごされました。その後、イエス様はバプテスマのヨハネのところに行き、多くの民衆と共に洗礼を受けました。これがイエス様の公の生涯の始まりです。その後イエス様は、荒れ野の中で四十日間悪魔から誘惑を受けました。その後イエスは、ガリラヤ地方で伝道を始めました。ガリラヤの諸会堂で教え皆から尊敬を受けたのです。その後、イエスさまは御自分の育った場所ナザレの村にやって来ました。そういえば今は、丁度春休みです。普段は、遠くにいる若い人達も沢山故郷に戻って来ます。故郷に帰って来ると誰でも心が和みます。果たして、イエスさまは故郷に帰って心安らぐ時を過ごされたのでしょうか。折しも安息日になりました。イエス様は、安息日のいつもの習慣どおり、礼拝を守るために会堂に行きました。当時の会堂の礼拝では、旧約聖書の律法や預言者の巻物が読まれた後、御言葉の解説が行なわれず。同じような礼拝の進め方は、使徒言行録 13 章 15 節にもあります。アンティオキアの会堂で安息日の礼拝の行なわれた時でした。律法と預言者の書物が読まれた後、会堂長に指名されたパウロが立って御言葉の説き明かしをしています。ナザレの会堂で、イエス様は自ら聖書を朗読し、説き明かしをされました。ここから神は、イエスさまを通して新しい事を始めようとされたのです。しかし、それはまだ人々の目には隠されていました。イエス様の手に、預言者イザヤの巻物が渡されました。イザヤ 61 章 1~2 節からの言葉です。貧しい人々に福音を告げるため、打ち砕かれた心を包み、捕らわれた人々に解放を知らせるために、主の恵みの年を告げるために神は、約束された方を遣わしたと言います。この言葉は、旧約の時には、バビロン捕囚からの解放を約束する言葉だと考えられて来ました。そして、ユダの人々がバビロンから帰還出来たのでこの言葉は既に成就されたことのようにも思われていました。しかし、捕囚から帰還した後もユダヤは完全な自由はなく、イエス様の時代はローマ帝国の支配下に置かれていました。この状態から、救ってくださる方が来ることをユダヤの人達は望んでいました。イザヤ書のこの言葉も神様がいつかメシアを遣わす約束の言葉と考えられる様になりました。この御言葉を読んでイエスは、巻物を会堂長に手渡しました。会堂にいるすべての人の目がイエス様に注がれていました。イエス様が、何をお語りになるか期待していたのです。

イエスは、言われました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが、耳にしたとき、実現した」。こう言って話を始められました。本当に、イエス様は、預言者以上の方です。この方は、人々に罪の赦しと解放を救いを語るだけではありません。実際に救い実現させる事ができる方です。何故なら、イエス様が神の油注がれた方だからです。神の特別な計画によって、救いと解放はイエス様を通して現実のものとなったのです。イエスの地上の生涯は、恵みの年の始まりでした。神の独り子イエス様が、自ら御言葉を語られてそれが聞

かれること。それは特別な事でした。それで「この聖書の言葉は、あなたがたの耳で聞かれた今日、この時に実現した」とイエスは言われたのです。

皆は、イエスをほめ、その口から出る恵みの言葉に驚きました。人は、神の口からでる一つ一つの言葉によって生きるものです。イエスさまは、神の遣わした独り子です。この方の口から出る言葉を聞いて、受け入れる事は非常に幸いなことです。

人々は、最初イエスをほめ、イエスの口から出る恵みの言葉に驚きました。わたしたちは、良いことにも悪いことにも驚きます。イエス様の言葉を聞いていた時のみんなの驚きは、最初の内は良い意味での驚きだったと思います。皆最初はイエス様をほめていたくらいですから。しかし、人々はこのように口に出して言いました。「この人は、ヨセフの子ではないか？」この言葉を口に出した時人々の中にイエス様への敵意が芽生えたのです。イエス様がこう言われています。人の口から入る食べ物で人は汚れてしまうことはない。しかし「口から出てくるもの（言葉）は、心から出てくるので、これこそ人を汚す」（マタイ 15 章 18、マルコ 7 章 20 節）。わたしたちも自分では気付いていないかもしれませんが心の奥に本当に汚い思いを抱えているのだと思います。

人々の心の心のつぶやきを引き出すかのようにイエスはこう言われました。あなたがたはこう言うだろう。「『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが郷里のここでもしてくれ』というに違いない」イエスが、病人を癒された、人々に取り憑いた悪霊を追い出した等の噂があったからです。わたしたちは、故郷で錦を飾りたい等と言います。また故郷の人に恩返しをするために戻って来るという話はよくあります。しかし、イエス様はこんなわたしたちの常識では考えられないことを言われました。「預言者たちは、自分の故郷では歓迎されないものだ」と。どうしてこんなことを言われたのか。わたしたちには解りません。イエスは、有名な預言者エリヤとエリシャの実例を引き合いに言われました。この二人の預言者達はユダヤ人なら誰もが尊敬して病まない人達です。エリヤは、異教の神々バアルに仕える祭司達と対決して勝ったことで有名な人です。エリシャは、その弟子でエリヤが天に挙げられて行くのを見た人です。しかし、エリヤたと同時代に生きたイスラエルの人々はこの二人の預言者達を喜んでいなかったのです。エリヤの時代、人々は真の神を礼拝するだけでは満足せず。王が神殿の中にバアルの祭壇を立てて拝んでいました。この時代、主の預言者達は細々と隠れるように暮らしていました。三年半の間、神様はイスラエルに雨が降らないようすると預言者エリヤに告げました。そしてその通りになったのです。長い間の干ばつのために大規模な飢饉となりました。飢饉のためなくなった人達もいます。飢饉の時代イスラエルにも沢山のやもめがいました。しかし、神がエリヤを遣わされのは、異邦人のサレプタのやもめの家でした。エリシャの時、ナアマンというアラム軍の司令官がいました。この人は、アラムの王に重んじられていました。それは、かつて主がこの人を用いられてアラムに勝利をもたらしたことがあるからです（列王記下 5 章 1）。この人は重い皮膚病を患っていました。このナアマンの家の召使いの中にイスラエルから捕虜にされた少女がいました。この少女の助言に従って、ナアマンは預言者エリシ

ヤのところに出かけて行きました。エリシャの言葉に従ってヨルダン川に行って体を洗うと重い皮膚病が癒されたのです。イスラエルにも沢山この病気を患った人がいたのですがエリシャはこの異邦人のもとに遣わされただけでした。本当なら、イスラエルから救いがやって来てそれから他の人々にも救いが来る筈なのですが。イスラエルの人々は、神さまの遣わした預言者達を喜ばなかった。エリヤ、エリシャも、故郷の人達には歓迎されて来なかったというのです。それである時には、二人の預言者は異邦人のところにのみ遣わされるという結果になったというのです。預言者達の語る神の言葉を受け入れた人達の中で救いは実現したのです。ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、御言葉を聞いて受け入れる人に神の救いが来るのです。反対に、御言葉を聞いても受け入れない人々には救いは実現しなかったのです。むしろ裁きがその人達の上に留まっていったというのです。旧約の時も新約の時もこの事実は変ることはありません。多くのユダヤ人達がイエスに躓き、異邦人達がイエスの恵みに与ったのもこの実例です。先のものが後になり、後のものが先になるのです。

この言葉を聞いて、イエスの故郷の人達は烈火のごとく怒りました。そして、ナザレの山の崖のようになったところにイエスを連れて行きました。この崖の上から、人々はイエスさまを突き落とそうとしたのです。最初の内は、皆がイエス様のことをほめていたのに。どうしてナザレの人達はイエス様にこんなことをしたのかと思います。イエス様は、誰にも悪いことをしていないのに、どうしてなのかと。これが、わたしたち人間の心に隠れているものだ。イエス様は、身をもって教えてくださいました。イエスさまは、人々の間を通過してそこから出て行きました。イエス様は、命が惜しくて逃げたわけではありません。まだ神様の定めた時が来ていなかったから、イエス様は人々の中から逃れて行ったのです。このように、イエス様の公の生涯は最初の頃から波乱に満ちたものでした。イエス様の里帰りは、受難の始まりとなりました。人々の心の中に隠された悪意もイエス様の前では隠れていることは出来なかったのです。このナザレの人々の中にわたしたち自身もいるのです。わたしたちも、心の奥深くに神様を喜ばない気持ちや、隣人の幸せを喜べない気持ちを隠しています。神の遣わしたイエス様を喜べない。イエス様の語られた言葉を受け付けないもの達なのです。やがては、イエス様は神のご計画の通りに、聖書に記された通りに人々の手に渡されて殺されて行くのです。イエス様はこのことを弟子達に三度も予告されました。イエス様が殺されたのは何のためだったか。わたしたちの罪が赦されるためにイエス様は自らを犠牲になさったのです。イエス様が自らの命をさ献げて、執り成しをしてくださいました。このことによって、聖書に約束された救いの言葉は、実現したのです。わたしたちは、この方を心から受け入れるものになりたいと思います。イエス様の言葉を喜び、御言葉に従うこと。ここにわたしたちの永遠の救いがあるです。 [説教者：堀地敦子]